

書 評

Ezra B. W. Zubrow (ed.), *Demographic Anthropology, Quantitative Approaches*,
University of New Mexico Press, 1976, xix+299pp.

本書は原名 "Demographic Anthropology" で、300頁から成る単行本であるが、8人の人類学者による人口問題セミナーをまとめたものである。代表者はスタンフォード大学の EZRA B. W. ZUBROW 氏であるが、人類学者が何故人口問題を研究しなければならないかということから議論が進められている。氏の問題提起には4つの点があるが人口統計と人類学の関係、人類学の人口へのアプローチ、若干の仮設と相互作用の変数の問題、未来動向に関する視野、といったものである。特に彼の理解は、定義、歴史、方法論に対する概念的及び理論的問題に焦点が当てられている。

つまり Demography は human population として定義されるが Anthropology は、人口の文化及び人間関係の開拓研究も含まれるとしている。特に重要な指摘は今までの人口学者というものは、しばしば人口と文化の存在を無視してきていることに対する批判ともとれる。

したがって文化は人口から成っており、またすべての人口は一つ以上の文化から成り立っているという認識に立ち、一般普遍性と同時に etic, emic (人類学的生活環境の要因的専門語) を持っているとする。つまり自然生活史というものを近代社会の中で如何に対応させるかという命題をも持っているといつてよい。例えば彼の洞察するところでは工業都市化というものの分析では人口プロセス、また社会プロセスや経済プロセスといったものの効果を分離させてしまう傾向があるが、これを再結合させて行く研究が人口人類学の一つの分野でもあるということである。

ただ問題はこのような複雑多岐にわたる文化というものを如何にして具体的に人口学の要因として調整して行くかという方法論であるが、彼の試みは人口変数34と人類学的変数36の相関作用の検討を人口サイズとの関係で行おうとしている。そして彼の予測では Family and Kinship, migration, fertility and mortality, aging などの点について今までの人口学的通念の解釈とは異った見解も示されていることが注目を引いた。この中の若干例を紹介すると、資源が人口より小さい場合は親族網の重大性は増加するとか社会変動性が減少するとか family については家族のパターンの数は増加するが核家族によって置き換えられる必要はない。また fertility と mortality については、経済的発展は出生率を低める必要はないとか、死亡率が減少するにつれて大家族の経済機能は全体として社会へ移行するといったものがあげられる。さらに aging については、多くの社会にとって人口の老齢化は人生を長くするよりも出生率を減少せしめる作用をする。また移出民は人口をふけさすといったことが目についた。そして最後にこれからの人類学的人口研究はマルサスへの挑戦と現在の人口資料の不確かさの是正といったものを述べていた。この外の人類学者の人口論的発言を見ると、大筋は以上の Zubrow の要約につきるのであるが Wagener は先史時代の人口増加に対して推定を行なっているし、Binford や Chasko は人口増加と sedentism (定住主義) の関係を論じこれがパラレルになっているのは死亡率の減少よりも出生率の上昇によること Hammel は血族結婚への研究、

Longacre は1%以下の自然増加の意味 Spuhler は人口の自然淘汰問題を取りあげ、異った出生率による自然淘汰は意外に有意性が高いことなどが述べられている。Wolf も台湾における事例研究を性的関心と出生率との関係で発言していた。

詳しくは前記書物を一読されたいが今後の人口問題の課題として文化的要因を如何に組み入れて行くかは重大な研究命題であり、また国連第19回人口委員会でもこのことが強調され出していることは人口理論研究にとって忘れてならないことである。

(篠崎 信男)